
地獄住宅

カツオ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

地獄住宅

【Nコード】

N0815A

【作者名】

カツオ

【あらすじ】

昔、大量の悪霊が取り憑いていたマンション。そこで除霊をした霊能力者が次々と死んでゆく。そしてまた新たな犠牲者が出てくる。一体このマンションにはどんな悪霊がいるのか

プロローグ

10年前、その住宅は出来た。

斬新な外見と広さが売りのこの住宅には、地元の住人にはすごく受けて入居者が増えた。

だが、その住宅に大量の悪質な悪霊が住み着いた。有名な霊能力者が何人も集まってなんとか、悪霊を成仏させた。

だが、その事件から1ヶ月後、霊能力者たちが続いて死んでいった。

しかも、全員死ぬ前に、
「おまえたち、私たちの恐ろしさ、まだ分からないのか、覚えてろ、いつか、あのマンションを」

しかも、マンションにもそう書いてあった。
ペンキ屋は何回も消したが、また浮き上がってくる。
しまいにはシンナーを使ってなんとか消えた。

何故かシンナーを使ったら浮き上がってこない。
それは、不思議に追加された。

ある日、その住宅に住んでいる男が、廊下で殺害された。
次の日、女が屋上から飛び降りた。

人々はまた悪霊が帰ってきたと言って恐れられた。
だが、自然に心霊現象は消えていき、悪霊は消えていった。

あれから、5年たった。噂は消えていき、住人はどんどん増えていった。

第1話 引っ越し(前書き)

ども、カツオです。夢は大学に入らない小説家です。きっかけや友
を読んでくれた人、ありがとう。これからもうろいろな小説を書く
のでよろしく

第1話 引っ越し

ある日、このサン・マンションに一台のトラックがやってきた。その後ろに、乗用車がやってきた。そこには、一つの家族が乗っていた。

そこにいたのは、久保ファミリー。

息子たちのマンションに住みたいという願望を無駄にしたいくないから、このマンションに住んだ。

部屋は860号室。

結構広い。てかでかい。

部屋に入ると、なかなか広い。父らしき人は、少年に話しかけた。

「どうだ、真一。マンション住みたかっただろ？どうだ、このマンション？」

真一は驚いた顔をしている。

なぜなら、こんなマンションに住むとは思ってなかったからだ。

「すごい。こんな大きいマンション初めて」

「そうか」

すると、弟の亮が真一の所に来て、

「お兄ちゃん、外に出てかくれんぼしようよ」

と言ってきた。真一は頷いて二人で走っていった。

「はは、二人とも無邪気だな」

すると、母の美樹が和也を呼んだ。

「二人にいうのが嫌だから言うけど、ここ、昔いっぱい幽霊がいた

んだって」

「なあに、昔の話だろ」

そのころ、二人は自分たちの部屋の前でじゃんけんした。

結果は亮がグーで真一がチョキ、真一の負けになった。

「やったあ、お兄ちゃんの鬼。30秒ね」

そう言つて亮は走つていった。

真一が30秒数えていると、誰かが通つたような感じがした。

しかも、何往復もしてる。真一はうわぁと思つたら聞こえてしまつた。

「もう、逃げられない。死んでも」

真一は

「うわっ」

と言つて後ろを向いた。誰もいない。しかも、亮がいた。

「あああ！お兄ちゃん、後ろを見た！いけないんだあ」

「あつごめん」

真一が言つた後、亮は走つていった。

真一は、30秒数えた。

一方、亮は隠れる場所が無くて焦つていた。どの部屋も鍵が掛かつて開けられない。

最後の扉を見たら、鍵が掛かつてない。

亮はラッキーと思い、その部屋に入った。中は昼なのに薄暗かった。

亮はここなら見つからないと思つてずっとここに隠れていたなら、なんか音がする。

いや、音じゃない。うめき声、亮は固まった。

真一はまだ探している
「どこだあ」

亮が固まっている間、うめき声はどんどん攻めてくる。そして、姿を現した。

割れている爪、ボロボロの服、どんどん見えてくるそして…
「うわあああああああ！！」

真一が気付くと、亮は泣きながら真一の所にやってきた。
「亮、みっけー」

だが、亮はまだボロボロに泣いている。
とりあえずかわいそうに思って自分たちの部屋に帰った。
帰ってくる時、和也と美樹は驚いた。

学校にいくと、みんなが真一のところに来てきた。
多分、引越しの感想を聞きたがってるのだろう。
みんなが聞いた。
「マンションどう？」

「結構広いし、でかいし、いいところだよ」

「近くにコンビニはある？」

「無いけどスーパーはあるよ。ファミレスもあるし」

「そのファミレスおいしい？」

「制服は？」

「スーパーは肉安い？」

「ペットボトル500ミリリットルは1000円？」

「マンションのことだけにしてくれ」

次の日、なんかどたばたしていた。

和也が出てみると、一人暮らしのサラリーマンが引っ越し屋と一緒に引っ越しをしていた。

サラリーマンは呟いていた。

「こんな場所、すまなきゃよかった」

すると、サラリーマンは和也に気付いて話しかけた。

「ああ、うるさいですよね、すみません」

「あの、何言ってるんですか？」

「はい、あなた達も気をつけた方がいいですよ。ここは、地獄住宅ですから」

「えっ!?!?」

和也はわけも分からぬままサラリーマンを見送った。

第3話 克也 中元

久保一家がこのマンションに住んでから1ヶ月が経った。

次第に近所の人々とも慣れてきた。

特に仲良くなってきたのは、隣の大川さん一家だ。一人息子の克也は後輩だ。

真一が朝出てくると、克也が待っていた。

「先輩！行きましょう」

克也はこういつて近づいてくる。

克也は真一と、克也のあこがれの中元と仲がいいという噂を聞いて、もしかしたらデートできると思って近づいてるらしい。

二人は歩きながら言った。

「先輩、中元先輩とのデートは？」

「ああ、そうか。今日言うよ」

「お願いします」

「えっ、デート？」

中元はいきなり真一からデートと言われて驚いている。

「おう、近所の後輩がおまえに恋しているんだ。頼む、付き合おう気なくてもいいから」

「うっん」

「頼む、後輩の信用を失いたくないんだ」

「分かった」

「すまーん」

「えっ、デートいいんですか」

克也は驚いている。すると、真一はうなずいた。

「ああ、あのマンションの近くのテーマパーク。中元、あそこ行き
たかったんだって」

「うっしやあああ！」

週末、克也は勝負服を来て緊張しながら入り口付近で待っている。

待ち合わせの時間より3時間早く来ている。

克也は胸を押さえながら深呼吸している。

すると、中元が走って来た。走って来るのを見ると、もっと緊張が増す。

中元が来ると、中元は口を押さえてかっこいいと言っている。

「お願いします」

「よろしくね」

そして、二人はいろんな乗り物に乗った。

ジェットコースター、メリーゴーランド、バイキング、室内コースター、シューティング、他。

最後は観覧車に乗って帰った。

その後、いきなり中元は言った。

「そういえば、ここが近くだよね」

「えっ」

「行きたいなあ」

「えっ別にいいですよ」

「やった」

そして、地獄住宅にやってきた。

「大きいー！」

克也が照れる中、二人はエレベーターに乗った。

8階を押して、エレベーターは上がっていった。

克也はすごく緊張した。

なんで家にかかるんだろ。もしかしたら…と思うと、すごく興奮する。

克也がドキドキしてる中、グギギギという音を立てて止まった。

「えっ、故障？」

中元が慌てている。

監視カメラには、二人の他に黒い影が映っている。

「でも、先輩。ここ4階です…」

すると、血だらけの女がエレベーターの窓にひっついてる。

「きゃあああ！」

「うわあああ！」

すると、エレベーターの緊急非常口（天井にあるあれ）から無数の手が出ていて、中元と克也を捕まえようとしている。女が窓の中に入って、克也の顔を掴んでじっと見た。

「うわああああ！」

克也が消えた。

「ちょっと、克也君、どこ言ったの！」

すると手が中元を掴んで緊急非常口のほうへと入れていく。

「やめてええええ！」

中元は引き込まれた。

「マタ、二人モ捕マエタ。私ノ恐ロシサ。マダマダツツク。ハハハハハハハハ」

女は消えた。ただいま、被害者二人目。

第4話 庄平（前書き）

ども、今日も波平の前で正座して叱られているカツオです。

呪怨、超怖いですね。ホラーには強い俺でも、目をつぶりました。

はあ、こわ。 後書きで体験した怖い話を紹介します。

第4話 庄平

克也と中元が消息不明になったのは、あの事件から3日たった。真一は自分のせいで二人が行方不明になったんだとすると、とても怖かった。

あれから1ヶ月たった。

もう見つからないと確信した時、まだ諦めない人がいた。そう、克也の叔父、庄平だ。

庄平の大健闘の末、二人の最後を見た人を見つけた。

それは、エレベーターに乗る所だった。

それを見たのは、中元の親友の美樹だ。

美樹の証言を聞いて、庄平はエレベーターに乗った。

そのころ、真一は竹藪を通っていた。

真一の考えでは、竹藪の中で死体になっているか、竹藪の奥まで行って迷子になったか、どちらでも見つけたい。

そして、真一は竹藪を通りきった。

それは、大きな館だった。

真一は怖がりながら門に入ったら、足に何かがぶつかった。足下を見ると、ドーベルマンの死体だった。

「うわっ」

真一は足をどかして逃げた。すると、

「どこいくの」

真一は固まった。

固まりながらそっと後ろを振り向くと、血だらけの女が首をグリグリ回しながら近づいてくる。

「うわあああああ！」

真一は急いで竹藪の中に入った。

庄平がエレベーターで8階のボタンを押して上がった。

エレベーターは故障も無く8階に着いた。

故障は無かったなと庄平は思いながら、廊下を歩いた。

すると、少し開いてある空き室があった。

庄平は不審に思ったのでドアを開けた。

それは、真一の弟の亮が入ったあの部屋だった。

やはり、中は昼なのに暗かった。

そして、女のうめき声。

庄平はだんだん後ずさりした。すると、ドアが閉まった。庄平は

「わあああ」

と言ってドアの方へと向かうが、開かない。

庄平はけっこう力があるのにあかない。

「なんでだよ、なんで開かないんだ!!」

庄平はベランダに向かったら白い目をした老若男女が何十人も立っていた。

「わあああああ！」

庄平はしりもちをついて、そのまま後ずさりしたら、何かにぶつかった。

庄平が上を見ると、血だらけの女が立っていた。首をグリグリ回している。

「ぎゃああああああああああ!!!!」

窓が開いて何十人も老若男女が庄平の所へ来る。

そして、一瞬で庄平は囲まれた。

「わあああああああ！！！！」

庄平は消えた。中元の同級生の美樹はドキドキしていた。美樹は、最後の姿を見てしまった。そして、消える時も…。

第4話 庄平（後書き）

それじゃ怖い話。俺の友達にKがいます。Kはカードゲームが大好きです。俺は秩父出身なんです。ある日、Kが熊谷までチャリで行こうと言ったんです。そして、その途中で霊を見ました。 終わり！

第5話 美樹

今日、二人の葬式をやっていた。なぜかと言うと、二人の遺体は、建つてすぐしか開けられていない倉庫に寝そべっていた。

二人の顔は、まるで地獄から帰ってきた感じだった。

葬式ではおなじみの、棺桶を開けて、花を添えることは無かった。

まるで、心靈写真を現像しないと同じことだ。

二人の消える姿を見てしまった美樹は、葬式が終わった後、地獄住宅に来ていた。

なぜ、地獄住宅に来たかというと、あいつぐ霊能力者の中に、美樹の祖母がいた。

あれからの美樹の祖母は何もないのに毛布で何かを払ったり、「何かが見ている」

とか言ったり、たまに何かに取り憑かれたように変な言葉を言っている。

絶対美樹の祖母の死や親友の死は全て地獄住宅に関係しているとまとめていた。

そして、美樹は地獄住宅に入った。

管理人を素通りして、美樹はエレベーターに乗った。

美樹は、中元と克也がエレベーターに乗った時、走って登っていた。

美樹は陸上部だから速かった。

そして、エレベーターより早く着いた美樹は4階で暇してた時、女が待っていた。

そして、エレベーターが着いた時、女はめり込んで入った。

美樹は目が点になっていた。

克也と中元は悲鳴をあげて暴れていた。

そして、緊急避難口から無数の手が出て、克也と中元が消えていた。

二人の血だらけの女は、口が裂けてニマツと笑っている。

美樹はもう諦めて膝をついた。二人の女は迫っていく。

美樹は消えた。「アイツノマゴカ。チョットダガ、レイシノノウリヨクガアツタナ。ソシタラ、アノナゾガワカッタラコマルカラナ。シンデヨカッタ。ハハハハハハハハ」

真一は窓を閉めて、ガムテープを何重にも貼っていた。

真一は顔が青白くなっていた。

第6話 亮

ぴっちり閉まってるカーテン、ガムテープで何重にも張ってる窓。

真一はそれを何回も見回してまた眠る。

「はい。今日も休みます。すみません。お願いします」

美樹が学校に電話している。美樹は真一が心配でたまらなかつた。

「真一、大丈夫？」

美樹は真一の部屋に入った。そして、驚いた。

閉まってるカーテン、ガムテープが張ってある窓、何枚も張ってあるお札。なんかに取り憑かれた感じだった。

「なに、この部屋!？」

美樹が真一に聞くが、真一は青白い顔で何回も顔を横に振った。

「カーテンなんか開けっ放しにして…」

美樹がカーテンに手をかけようとした時、

「開けるな!!」

美樹は驚いて手を離れた。

「頼むから出てっつてくれ!!」

「でも…」

「いいから出てけ!!」

真一は枕を投げた。美樹は慌てて出ていった。

「あのうちの息子が変なのですが、もしかしたら、幽霊に取り憑かれたのかもしれないかと思って、電話したのですが」

美樹は霊能力者に電話をかけていた。今から来るそつだ。

怪訝そうな顔で霊能力者が真一を眺める。

「なんだおまえ!？」

「安心しろ。私はあんたを助ける」

とって、霊能力者は手でなんかしていた。

「息子さんの体に最悪の悪霊が2体います」

美樹は驚いた。

「このままにしておく、精神がおかしくなり、いずれ、死にます」
「えっ！」

霊能力者は分厚い本を出して、ペラペラめくった。

「今息子さんに憑いてる悪霊は、この住宅で原因不明の死に至った二人の若者です」

美樹は霊能力者が言う事に驚きが隠せなかった。

「二人の悪霊は息子さんから離れたいけど、ボスの悪霊に操られる悪霊です」

ボス？悪霊界にボスなんているのか？なんで真一に取り憑くように操ったんだ？

美樹は霊能力者がいる間ずっとそう考えていた。

霊能力者は真一の状態を言った後、分厚い本を皮の鞆の中に閉まった。

「私はいつでもいますからなんかありましたら言ってください」

「あの、お金は？」

「いえ、私は鑑定だけではお金はいりません。では」

ドアを開けて霊能力者は帰っていった。

美樹は何回も頭を下げた。

すると、誰かの走る音が聞こえた。音を聞く限り、小さい子供が走っている感じだ。

美樹は子供の幽霊かと思つて身震いしながら座った。

美樹は理解していなかった。

真一には悪霊が取り憑いていて、代わりに悪霊に取り憑かなきゃ真一は死ぬ。

代わりに取り憑かれれば、真一は助かるが、代わりの人は死ぬ。

もう死ぬ以外の宣告しかないじゃない。美樹は泣いた。この家族の誰かが死ぬ。

「マジかよ」

晩酌中の和也に美樹は真一の状態を告げた。

「何だよそれ。そんなに力が強い悪霊なのか？」

「年も関係ないんだって、子供でも年寄りでもいいんだって」

すると、子供の足音の後、ドアが開く音と閉まる音がした。

「まただ」

美樹が言った。

「あの足音か？」

「そう、霊能力者が帰ってから」

「真一に取り憑いてる悪霊かもよ」

「ふざけないで」

今日真一の家に来た霊能力者の家に一人の人が入ってきた。

「どうしたのですか。私になんか用事でも？」

霊能力者が言うのと、その人は息をぜーぜー吐きながら言った。

「久保真一に取り憑いている悪霊を取り憑きに来た」

「この悪霊に取り憑かれた後、あなたも私もすぐ死にます。それでもいいのですか？」

霊能力者が聞くと、その人はうなずいた後座った。

「始めます」

その人はうなずいた。

「（訳分らない言葉）」

訳分らない言葉を手を合わせながら霊能力者もその人もつぶやく。

やがて、部屋の周りに霊的な煙が漂って、人影が現れて来た。

「来たぞ」

ここは、どこなんだ？なんか、久しぶりに見た光だ。

真一がそう思って目を開けると、美樹と和也がいた。美樹は泣きそうな顔になっていた。

「ここは？」

「家よ、真一は霊に解放されたのよ」

真一がつぶやくと、美樹はなきながら答えた。

「そうか、俺、悪霊に…よかった。あれ、亮はどこにいるの」

美樹も和也も黙ったままだ。

「亮、まさか」

和也がうなずき、亮の遺影を見せた。

「なんで、なんで亮が死んでるんだよ!？」

「真一が助かったのは亮のおかげなんだ。真一には二人の悪霊が憑いていて、このままだと死ぬからその代わりに亮が」

「…」

「でも私たちも納得はしていない。亮は多分だが、真一に戻ってもらうなら、悪霊が取り憑いてもよかったんだ」

そう、美樹が幽霊だと思っていた子供の足音も亮が走っている音だった。

亮は真一に悪霊が取り憑いている事を立ち聞きしたのだ。

「なんだよ。このマンション…お父さん、引越そう!…このままだと、家族全員が死んじゃう」

「ああ」

すると、どこからともなく声が。

「モウニゲラレナイ、ゼツタイニガサナイ。コノマンションカラハ、ゼツタイニ…」

久保一家は青ざめた。

第七話 もう逃げられない

亮が死んだ。俺のために……！真一は床を拳で叩いた。

それにしてもあの言葉。いずれ俺達も消える。そう察した真一は家族に向けて言った。

「父さん！！母さん！！この住宅から出よう！！引越そう」

「でもすぐ家が見つかるか？」

「どこでもいい！ここから逃げられれば、どこでもいいんだ！」

「わかった。でも真一、明日にしよう。明日になったら俺の実家に行こう。いいな」

真一はうなずいた。

ついに逃げれる。

真一以外にも家族全員がそう思っていた。

だが、地獄住宅はそうかんたんには逃げられない。

翌日、和也がニュースを見ながら朝食を食べていたら、何かに驚いてコーヒーをこぼしてしまった。

「ああもう、何してるの！？」

美樹がふきんでこぼしたコーヒーを拭きながら言った。

「見るよ！！あの写真。あいつ、俺達が引越したすぐに引越した会社員だよ。原因不明の変死だと。もう、逃げられないんだ！！この地獄住宅からはもう逃げられないんだ！！」

家族が一斉に黙った。引越しても助かるのか？そう思うと不安で何も出来ないのだ。

「もうお引越しなさるのですか？」

管理人が残念そうな顔をして真一達を見る。

「なあ、あんた知ってるか？この住宅……地獄住宅は呪われてるんだ！！」

気が動転した和也は管理人の胸ぐらを掴んだ。

「はい。知ってますよ」

えっ？真一達は管理人を見つめる。

管理人は不適な笑みで真一達を見ている。その目は何かに操られたような目だ。

「じゃあなんで、なんで何も言わないんだ!？」

「そりゃそうでしょ。自分の利益を自分から無くす奴がどこにいますんだい？」

「クソっ!!」

真一が住宅の柱をおもいつき蹴った。

管理人とのもめごとも済んで、久保一家は荷物をまとめていた。

「あなた、電子レンジとか冷蔵庫はどうするの？」

「冷蔵庫はリサイクルショップにでも売って、小さいやつとかは持っていこう。お袋と親父にはちゃんと事情を言ったからこのぐらいなんとかなるだろう。」

真一が窓から何かを見つけたらしく、和也に声をかけた。

「お父さん、引越し屋、もう来た」

「呼んできてくれ」

真一はこくりとうなずいて、ドアに向かって走り、ドアノブに手をかけ、回そうとした。だが、うまく回らない。

「あ…あれ？開かない。ドア開かないよー」

「ちゃんと回したのか？」

「ちゃんと回してるけど…」

真一が何回もドアノブを回していたら、急にドンドン!!とドアをノックする音がした。

急な音で退いた真一だが、そっとレンズを覗いた。

その人は、髪が濡れた女がにいつと笑っていた。

「うわああああああ!!」

真一が驚いてベランダの窓を開けようとするが開かない。

何回もドンドン叩いたり、鍵が掛かっているか確認するが開かない。

「開かない!!この部屋のドアが全部開かない!!」

「ほら、言っただろ。この住宅に入った時点で誰も逃げられないだ」

和也が怯えてる時、美樹が荷物を入れようとダンボールを開けたら、色白の女が美樹を見つめてニツと笑った。

「いやああああ!!」

美樹がダンボールをひっくり返した。衣服以外中には何もなかった。

「たたけ、ガラスを叩け!!」

和也が冷や汗をかきながら真一に向かって叫んだ。

真一は和也の必死そうな顔を見て、何かを察して金属バットを出してガラスを叩き割った。

和也がダンボールの中から綱を出した。

これで、家族が助かると和也は安心してベランダに出た。

「美樹!!今綱を垂らすからこれを使って降りてくれ。それからマンションの中に入って家のドアを開けてくれ!!」

「わかった!!」

和也は綱を下に垂らして美樹に綱を掴ませた。

「真一、綱を押さえるの手伝ってくれ!!頼む!!」

「分かった!!」

美樹がそつとベランダの柵を乗り越え、綱を掴んだまま慎重に綱を下ろす。

「コワイよ」

すると、真一は見えない気配を感じた。透明人間がいるみたいに感じる。そして、

チヨキン。きゃああああああああ!!グシャ。

真一と和也がベランダから下を見ると、綱を掴んだ美樹の死体があった。何者かに綱を切られたのだ。

「うわっ!!」

真一は自分を攻める顔になっている。

「やっぱりだ。やっぱり。この住宅は…」

和也が腰を抜かしたように座った。

「地獄住宅からは逃げられないんだ……」

ピンポン。チャイムが鳴った。真一と和也が驚いて振り向く。

「真一、あなた。私よ」

この、声は……。和也と真一が凍り付く。

「お母さん……」

「美樹……」

いや、違う。

美樹は今さつき死んだはずだ。

何者かに綱を切られて死んだはずなんだ。

真一はそう思いながら、ブルブル震えながら、美樹の死体を見た。

その時、真一の目にありえない状況が映った。

「お父さん……」

「なっ、なんだ？」

「お母さんの死体が、ない……」

「えっ？」

和也が下を見ると、そこには血と綱しかなかった。

「うそだ、うそだああああ!!」

真一が叫ぶと、ドアノブが壊れそうな勢いで回ってる。

「あけるおおおおお」

これは美樹とは違うもの凄く低い声だった。

「うわああああ」

真一と和也が叫ぶと、ドアノブも微動だにせず、何も聞こえなくなっ

「助かったの、か……？」

「やったよ、助かったんだよ!!お父さん!!」

「やったな!!」

ついに、助かったんだ。

一家の大黒柱の和也は、二人だけでも助かった事に変わりはないと思っ

「ダカライツタデシヨ。モウニゲラレナイノジゴクジュウタクハネ

…」

耳にずっと残るような低い声で誰かが言っている。

二人が静かに振り向くと、

「うわああああ……！！！！！！」

二人は消えた。

第七話 もう逃げられない(後書き)

地獄住宅はこれで終わりです。まだまだこの住宅の謎は残っています
が、この謎は次回に残しましょう。ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0815a/>

地獄住宅

2010年10月9日21時10分発行